

成人看護学実習における実習の不安と生活状況の関連性について

Summary of the Relationship between the Anxieties of Student Nurses Having Practical Training in Adult Nursing and their Living Conditions

飯出 美枝子, 鈴木 はるみ

要 約

本研究の目的は成人看護学実習における実習の不安と生活環境が与える影響の関係性を明らかにすることである。対象はK短期大学看護学科3年生80名に、実習開始前に自記述式質問用紙調査票と心理学的検査の日本版StateTeait Inventory (以後STAI) について、質問用紙を用いた。

その結果臨地実習前は状態不安・特性不安は高かった。

趣味と状態不安との間には、ストレスを感じた時に学生は、なんらかの趣味を行うことで気分転換を図り、ストレスに対応していることがわかった。

性格と特性不安との間には、学生自身が感じている性格で明るい・くらいでは、不安を感じていないと判断することは出来ないと考えることができた。

親に悩みを相談と特定不安との間には、学生は親に相談することより、実習に関しては同じグループや友人に相談している傾向がみられた。学生にとって相談ができる相手がいるということがわかった。相談をすることで、臨地実習のストレスが軽減できると考える。

すなわち不安やストレスを軽減・解消するには、生活環境の人間関係が関連していることが示唆された。

キーワード：成人看護学実習，生活環境，不安，STAI

はじめに

成人看護学実習は、多様な現象がみられる医療現場で行われ、学生は教員や他の学生だけでなく、患者や家族、医療従事者との複雑な相互作用を行うことを要求される。このような複雑な状況での実習は学生にとって大きなストレスを感じ、不安を増大することが報告されている¹⁾。

臨地実習は、学内で学んだ知識や技術を応用し実践的な能力を身につける場として重要な役割を持っている。そして、臨地実習場は、環境や指導者・教員・グループメンバーとの人間関係、自己の看護技術に対する不安など様々なストレスと直面することになる。

これまで臨地実習における不安とストレスには密接な関係があると報告されている²⁾。学生は実習の中で過度の緊張感と不安を克服しようとする力となり、学習する深さとともに学生自身の成長発達にも良い影響を与えるが、逆に過度の不安はストレスフルな状態を

招くといえる。

本研究では、学生に生活環境が不安をどのように解消し実習に臨んでいるのか検討し、成人看護学実習における実習の不安と生活環境が与える影響の関係性を明らかにすることで、今後の実習指導の一助としていく。

研究目的

成人看護学実習における実習の不安と生活環境が与える影響の関係性を明らかにする。

用語の定義

1. 状態不安³⁾

状態不安とは、「個人がそのときおかれた生活条件により変化する一時的な情緒状態であり今この瞬間にどのように感じているか」とする。

2. 特性不安³⁾

特性不安とは、「不安状態の経験に対する個人の反応傾向を反映するもので、比較的安定した個人の性格

傾向を示すものであり、特性不安を普段どう感じているか」とする。

3. 生活環境

生活環境とは、家庭環境特に同居の有無・趣味や日常生活に関する事は兄弟や友人を含め環境とする。

研究方法

1. 調査対象

K短期大学看護学科3年生80名

2. 調査期間

平成19年4月、実習開始前に自記述式質問用紙調査票と心理学的検査の日本版State Teait Inventory (以後STAI) について、質問用紙を用い回収した。

3. 調査内容

成人看護学実習における実習の不安と生活環境が与える影響の関係性を明らかにするため、基本属性・STAIの調査を実施した。

1) 基本属性

(1) 調査対象

性別、住居形態、性格、趣味、ストレス解消、対処法、親子関係 友人関係

(2) STAI

STAIとは、清水・今井(1981)によるスピルバーガーら(1970)のSTAI(状態—特性不安検査)の日本語版である⁴⁾。

状態不安・特性不安ともに20の質問項目で構成され、評定は1点から4点の4段階尺度で項目得点を合計する。状態不安・特性不安ともに20点から80点の値をとり得点が高いほど不安が高いことを示している。信頼性は係数は.08は保たれている。妥当性も確認されている³⁾。

4. 分析方法

母集団を把握するため、調査対象の属性について集計を行い、不安尺度の得点の平均点値と標準偏差を算出した。統計手法として、t検定、一元配置分散分析、多重比較を算出した。データはEXCEL2000に入力し、JAMPIN 4.0を用いた、有意水準は5%未満。

5. 倫理的配慮

アンケート調査の記入の有無によって実習の成績に影響のないこと、個人的に不利になることは絶対になく、この調査の依頼を拒否・中断する権利があり、研究としてまとめ公表する際には個人が特定できないようプライバシーの保護・秘密は厳守する旨を調査用紙とともに文書で明記し、尚かつ口頭で説明し同意の得られた学生である。

結果

成人看護学実習前学生80名を対象とし、自記式質問用紙調査票を配布した結果、解答が得られた76名、有効回答は76名(回収率95%)であった。

1. 基本属性

対象の基本属性は、表1に示した通りである。

家族構成は、「現在一人暮らし」が35名(46.0%)「同居」が31名(40.8%)であった。自分の性格は、「非常に明るい」が2名(2.6%)、「明るい」が22名(28.9%)、「時々明るく、時々暗い」が45名(59.2%)、「やや暗い」が3名(3.9%)、「暗い」が1名(1.3%)であった。趣味を持っているは、「有」が64名(84.2%)、「無」が9名(11.8%)であった。ストレス解消は「有」が67名(88.1%)「無」が7名(9.2%)であった。辛いときの対処法は、「対処する」が27名(35.5%)、「時々する」が17名(22.3%)、「対処するときとしないときがある」が21名(27.6%)、「あまり対処しない」が8名(10.5%)、「あまりしない」が0名(0%)であった。悩みを親に相談するは、「よく相談する」が9名(11.8%)、「時々する」が16名(21.1%)、「相談したりしなかったりする」が22名(28.9%)であった。

2. STAIに関連する要因

学生の不安を測定するためにSTATを用いた。クロンバックの α 係数は、0.866でSTAIの得点を表2に示した。また、STAIと基本属性と関連については、表3に示した通りである。

家族構成と状態不安については、同居よりも一人暮らしが高い傾向がみられたが、有意な差は認められなかった。

趣味と状態不安の間には、有意差が認められた($t=2.275$, $df=71$, $p=0.025$)。すなわち、趣味が「有」は、「無」より状態不安が有意に高かった。趣味と特定不安については、趣味が「有」は「無」より特定不安が高い傾向がみられたが、有意な差は認められなかった。

ストレス解消法と状態不安については、ストレス解消法を有する方が無いよりも高い傾向がみられたが、有意な差は認められなかった。また、ストレス解消法と特定不安については、ストレス解消法を有する方が無いよりも高い傾向がみられたが、有意な差は認められなかった。

性格と特性不安との間には、有意差が認められた($F=3.583$, $df=4$, 68 , $p=0.010$)。さらに、Tukey法による多重比較で差を検討したところ、特定不安で

表1. 基本属性

N=76

項目	カテゴリー	人数 (%)
性別	女	68 (89.5)
	男	6 (7.9)
家族構成	現在一人暮らし	35 (46.0)
	同居	31 (40.8)
兄弟・姉妹	いる	71 (93.4)
	いない	2 (2.6)
自分の性格	非常に明るい	2 (2.6)
	明るい	22 (28.9)
	時々明るく、時々暗い	45 (59.2)
	やや暗い	3 (3.9)
	暗い	1 (1.3)
趣味	有	65 (85.5)
	無	9 (11.8)
ストレス解消	有	67 (88.1)
	無	7 (9.2)
辛いときの対処	対処する	27 (35.5)
	時々対処する	17 (22.3)
	対処するときとしないときがある	21 (27.6)
	あまり対処しない	8 (10.5)
	全くしない	0 (0)
悩みを親に相談	よくする	9 (11.8)
	時々する	16 (21.1)
	相談したり、しなかったりする	22 (28.9)
	あまりしない	22 (28.9)
	全くしない	7 (9.2)
相談する友達	いる	73 (96.1)
	いない	1 (1.3)
信頼できる人	いる	71 (93.4)
	いない	1 (2.6)

表2. STAIの得点

 $\alpha = 0.866$

状態不安	全尺度
平均	57.76
標準偏差	±9.767
特性不安	全尺度
平均	57.76
標準偏差	±9.767

表3. STYIとの関連

N=76

項目	カテゴリー		有意確率
家族構成	一人暮らし	同居	
	n=35	n=31	
	Mean±SD	Mean±SD	
状態不安	59.68±1.61	56.45±1.71	0.361
特性不安	53.20±1.70	53.93±1.80	0.900
趣味	有	無	
	n=64	n=9	
	Mean±SD	Mean±SD	
状態不安	58.59±1.18	50.88±3.17	0.025
特性不安	53.42±1.30	49.22±3.48	0.265
ストレス解消	有	無	
	n=67	n=7	
	Mean±SD	Mean±SD	
状態不安	58.14±1.19	54.00±3.68	0.287
特性不安	53.42±1.30	49.22±3.48	0.265
t-検定			
カテゴリー			
辛いときの対処	対処する	時々対処	する時としない時
	n=27	n=17	n=21
	Mean±SD	Mean±SD	Mean±SD
状態不安	56.88±1.88	58.70±2.38	59.90±2.14
特性不安	53.25±1.99	55.41±2.51	53.33±2.25
親に相談	よくする	時々する	する時としない時
	n=9	n=16	n=22
	Mean±SD	Mean±SD	Mean±SD
状態不安	58.66±3.24	54.25±2.43	58.90±2.07
特性不安	55.55±3.31	48.25±2.48	54.04±2.11
カテゴリー			
あまりしない	まったくしない		
n=8	n=0		
Mean±SD	Mean±SD		
53.00±3.47		0.361	
45.62±3.66		0.180	
あまりしない	まったくしない		
	n=20	n=7	
Mean±SD	Mean±SD		
60.15±2.17	54.14±3.67	0.335	
56.90±2.22	45.71±3.75	0.030	

一元配置分散分析

は、「明るい性格」は「非常に明るい性格」より特定不安が高かった ($p<0.05$)。また「明るい性格」は「暗い性格」より特定不安が高かった ($p<0.05$) (図1)。

辛いときの対処方法とSTAIについては、「辛いときに対処する時と対処しない時」が高い傾向がみられたが、有意な差は認められなかった。

親に悩みを相談と特定不安との間には、有意差

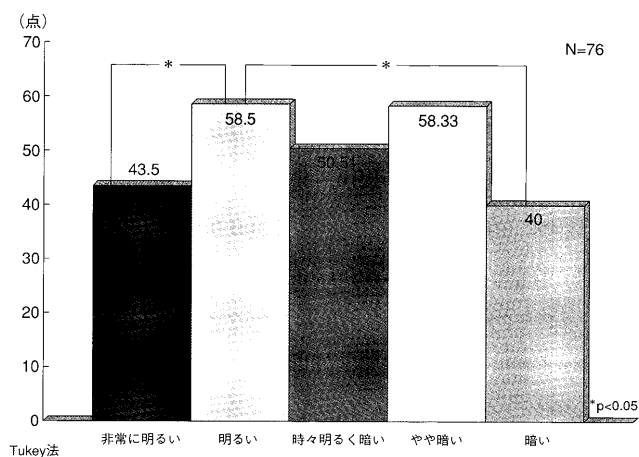


図1. 特性不安と性格との関連

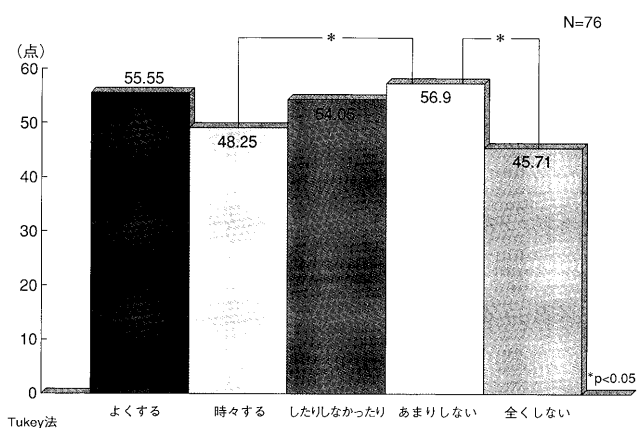


図2. 特性不安と悩みを親に相談するとの関連

が認められた ($F=3.922$, $df=4, 69$, $p=0.006$). さらに, Tukey法による多重比較で差を検討したところ, 特定不安では, 「親にあまり相談をしない」は「親に悩みを時々する」より特定不安が高かった ($p=0.044$). また「親にあまり相談しない」は「親に全く相談しない」より特定不安が高かった ($p=0.015$) (図2).

考 察

1. 実習に対する不安

本研究において, 実習前は, STAIの状態不安とSTAIの特性不安の高い傾向がみられた. 佐藤⁵⁾は看護学生を対象にした調査を行い「実習前よりさらに実習中のSTAIの状態不安の平均値が高くなる」と述べ, 河野⁶⁾らは「学生は実習前に不安が最も高いが, 実習の経過に伴って減少してゆく」と述べている. 本研究と類似の結果である.

臨地実習は, 多様な現象がみられる医療現場で行われ, 患者や家族, 医療従事者との複雑な相互作用を行うなかで行われている. また, 臨地実習は, 学内で学んだ知識や技術を応要し実践的な能力を身につける場

として重要な役割を持っている. しかし, 学生にとっては, 未体験である臨地実習は緊張の連続であると共に, 指導者・教員・グループメンバーとの人間関係, 自己の看護技術に対する不安など様々なストレスと直面することになっている.

2. 生活環境との関連

本研究において, 趣味を持っている者は, 持っていない者より不安が高かった. 趣味は, 自由時間に, 好んで習慣的に繰り返しおこなう事柄やその対象のことであり, 娯楽を求めようとして, 自ら自発的にある活動を繰り返しおこなう人間の行動のことである. 受動的なものもあるが, より能動的に何かを生産するものもある.

趣味は, 個人単位で行う趣味もあるが, スポーツや文化・社会的活動など, 多人数が集まって可能になる趣味もあり, 多種多様である. 学生の趣味は, 「ショッピング」「カラオケ」「音楽鑑賞」などが多く, 個人的に何かを生産する能動的なものである. 不安が高いからこそ個人的に何かを行って, 気分転換を図り, 不安を解消しようとしているのではないかと考えられる.

「性格が明るい」者は「性格が暗い」者より特性不安が高い傾向がみられた. 足利⁷⁾らは, 「不安状態が高い学生は, 大人の心, 順応な子供の心の得点が高い」と述べている. 布施らは「特性不安の高いものは, 他者に比べてよりネガティブな気分状態にあり, 精神的疲労感に加え, 身体的疲労感も高い」と報告している. 本研究と類似の結果である.

学生自身が明るい性格と判断しているの方が, 不安状態が高いということは, 明るい性格だが, 常に不安が生じていると推測できる. つまり, 性格が明るいから不安はないと判断すべきでない. また, 実習場では過度に緊張したり, 他者との関係もスムーズにいかなくなったりする場面が多々見られる. 臨地実習における不安とストレスには密接な関係があり²⁾, 学生は実習の中で緊張感と不安を克服しようとするために, 逆に過度の不安はストレスフルな状態を招くといえるのではないだろうか. ゆえに, 生活上では明るく振舞っているが, 内面は常に緊張や不安との葛藤が生じているのではないかと考えられる.

親に悩みを相談することに関しては, 「親にあまり相談しない」は「親に悩みを時々する」より特定不安が有意に高かった. また「親にあまり相談しない」は「親に全く相談しない」より特定不安が有意に高かった. 不安のある学生は実習に関して親に相談しない傾向があることが認められた. 親と別居している者が⁶

割以上であるために、相談したい時には側に親が不在であるという環境要因も関係していると考えられる。また、親と生活の場は一緒ではあるが、考え方や価値観・生活スタイルの相違から実習という過度の緊張感と不安を克服する状況について説明し相談することは、困難なのではないだろうかということが推察できる。

以上の知見より、実習の不安においては、実習前は不安が高く、生活環境との影響因子として、趣味が有る者や性格が明るい者、親に相談しない者の不安が高いことが示唆された。

結 論

1. 臨地実習前の学生は実習に関して不安を強く抱いている。
2. 生活環境との影響因子として、趣味の有る者や性格が明るい者、親に相談しない者の不安が強いことが示唆された。

本研究の限界と今後の課題

1. 本研究は、研究の趣旨に同意した対象に対してのみ実施したものであるため、結果一般化には制約がある。
2. 本研究では、統計的手法において条件全てに対処できるほどの調査対象を確保することができなかったという限られた情報による検討であった。
3. 本研究のデータの情報源は、主に質問紙調査される必要がある。対象が回答した内容であり、面接調査を行っていないため実際の行動そのものは含まない。したがって、情報としての有効性が制限されている。
4. 今後は、エゴグラムとSTAIの関連性も検討していく。

引用文献

- 1) 落合真喜子, 太田原裕美ら: 臨床実習における不安とストレス感情. 看護展望, 22 (3) : 101-109, 1977.
- 2) 野村幸子, 三好さち子ら: 初期の看護実習における学生の実習ストレスに関する研究. 聖隷クリストファー看護大学紀要, 6 : 39-40, 2000.
- 3) 上里一郎: 心理アセスメントハンドブック. 西村書店 (東京), 339-359, 1996.
- 4) 堀洋道: 心理測定尺度集Ⅲ, 183-187, 2002
- 5) 佐藤伸枝: 臨地実習前の不安要因とSTAIとの関連—基礎看護学実習の学生を対象として. 新潟青陵大学紀要, 2 : 39-45, 2002.
- 6) 河野保子: 実習評価に関する研究—臨床実習に対する看護学生の緊張感・不安感および疲労に関する一考察. 金沢大学医療技術短期大学部紀要, 1

(1) : 133-139, 1977.

- 7) 足利学, 芳田章子ら: 実習中に高い不安を有する学生のエゴグラムからみた自我状態. 藍野学院紀要, 14:25-31, 2001.
- 8) 布施敦子, 大佐賀敦ら: 臨床実習に伴う看護学生の疲労感とSTAI特性不安との関連. 日本看護学教育学会誌, 10 (3) : 11-20, 2000.

Summary of the Relationship between the Anxieties of Student Nurses Having Practical Training in Adult Nursing and their Living Conditions

Mieko Iide, Harumi Suzuki

Abstract

The purpose of this survey is to clarify the relationship between the anxieties of student nurses having practical training in adult nursing and their living conditions. 80 nursing students in the third year of junior college K were surveyed using a self-report survey question sheet and a questionnaire about the Japanese version of the psychological study State-Trait Inventory. Hereafter, STAI-J before the practical training. Results show the values of state-anxiety and trait-anxiety were high before the clinical practice.

Relationship between hobby and state-anxiety: When subjected to stress, students who enjoy a hobby for a change can cope effectively with the stress.

Relationship between character and trait-anxiety: It is not possible to determine that students do not feel anxious by their cheerful or gloomy personality.

Relationship between parental advice concerning problems and STAI-trait: The students tend to take advice from their group or friends more frequently than from their parents. It was found that the students have someone to turn to for advice. It is thought that stress relating to the clinical practice can be reduced by seeking advice.

This survey suggests that the relieving of stress and anxiety is connected to human relations in a living environment.

Keywords: Adult science of nursing training, Living environment, Uneasiness, STAI